

「新しい学びプロジェクトー市町と東京大学による協調学習研究連携ー」

平成 23 年度報告会 配布資料

平成 24 年 2 月 11 日

「新しい学びプロジェクト全体報告会ー2 年間の検証、そして次のステップへー」

パネルディスカッション

学びの未来へ：

新しい学びプロジェクト 2 年間のあゆみと今後の展望

○ パネリスト紹介 (p1)

○ 実践教材 中学校 1 年生 社会科 有田川町立石垣中学校 面矢和弥教諭

【大谷古墳から馬につける膏が出土したのはなぜだろうか】(p2)

○ 実践教材 中学校 1 年生 理科 安芸太田町立筒賀中学校 亀岡圭太教諭

【少量の水を入れて加熱した空き缶にふたをして冷やすと?】(p10)

○ 実践教材 小学校 1 年生 国語科 九重町立南山田小学校 恒任珠美教諭

【『だれがたべたのでしょうか』一問いと答えの関係を読み取るー】(p22)

○ 市町における研究推進【宮崎県五ヶ瀬町】(p29)

○ 市町における研究推進【大分県竹田市】(p31)

○ 参加各市町・県立学校における研究推進の概要 (p33)

パネリスト紹介（五十音順）

【教育長】

片峯誠（福岡県飯塚市教育委員会教育長 II期）

二見吉康（広島県安芸太田町教育委員会教育長 I期，
新しい学びプロジェクト代表）

【研究推進担当者】

澤野幸司（宮崎県五ヶ瀬町教育委員会指導主事 I期）

和田三成（大分県竹田市教育委員会指導主事 I期）

【研究推進員】

面矢和弥（和歌山県有田川町立石垣中学校教諭 社会科 I期）

亀岡圭太（広島県安芸太田町立筒賀中学校教諭 理科 I期）

恒任珠美（大分県九重町立南山田小学校教諭 国語 II期）

【コーディネータ】

日渡円（兵庫教育大学教授，新しい学びプロジェクト前代表）

【新しい学びプロジェクト】ジグソー法を用いた協調学習授業 授業案

学校名： 有田川町立石垣中学校

授業者： 面 矢 和 弥

教材作成者： 面 矢 和 弥

授業日時	2011年6月27日 3限目	教科名	社会（地理）
学年	1学年	児童・生徒数	18人（男子5名 女子13名）
単元（題材）	日本の古代国家の形成	本時／全時数	2／5

授業のねらい
大谷古墳の馬冑から、当時の日本の様子や、日本に多くの渡来人が来た背景、日本と東アジアの関係を考える。
授業の柱となる課題（ジグソー活動の課題）
なぜ、大谷古墳から馬につける冑が出土したのか。
課題に対して出してほしい答え（課題について子どもたちに語ってほしいストーリー）
<ul style="list-style-type: none"> ・大和王権でもかなり位の高い和歌山の王が、朝鮮半島に出陣しその戦利品として手に入れ、王の死後権威を象徴するものとして墓に飾られた。 ・大和王権でもかなり位の高い和歌山の王と、朝鮮半島の国々（カヤ）とは、交易や渡来人の交流中で親しい関係であった。その友好の印に馬冑をプレゼントされた。王の死後権威を象徴するものとして墓に飾られた。
各エキスパート（答えを出すための部品）
<各エキスパートの資料内容・課題・つかんでほしいキーワードなどを>
<ul style="list-style-type: none"> ・大和王権という面から見た考え。（古墳に葬られていた人物は、大和王権と関係のあるかなり位の高い人物である。力を見せつけるために墓に飾られている。朝鮮半島に進出していたので、戦いにより手に入れた。） ・東アジアの国々との関係という面から見た考え。（和歌山は、朝鮮半島とつながりの深い土地であった。出兵して、戦いに勝ち相手の身につけていたものを戦利品として持ち帰った。朝鮮半島との交易にを通じて、友好のしるしにもらった。） ・渡来人という面から見た考え。（鉄を作る技術を持っていたのだから日本で作ってくれた。渡来人が朝鮮半島からもってきたのかもしれない。戦争で逃げて来たのだから、最新の兵器を提供することによって母国を救ってほしかったのかもしれない。）
ジグソー活動でわかったことを踏まえて取り組ませたい発展的な課題（なしでも可）
日本人の先祖について考える。
グループ編成
エキスパート活動 3人×6グループ ジグソー活動 3人×6グループ

学習活動のデザイン

時間	学習活動	支援等
5	和歌山大谷古墳出土の馬の鎧の写真をみてどのように使っていたのか考える。 (電子黒板を使用)	○ 和歌山大谷古墳についてふれる。 鉄製であること、作るのには相当の技術があること、朝鮮半島でも見つかったりしている等について触れる。
5	本時の課題を確認する 大谷古墳から馬につける冑が出土したのか。 各自①大和王権②東アジアの国々との関係③渡来人の観点からどのようなことが考えられるか予想をたてる。。	○ 根拠に基づいた意見を述べるように留意する。 ○ 予想が実際はどうか見するために資料を読むように指示する。
10	エキスパート活動 ①大和王権②東アジアの国々との関係③渡来人のグループに分かれ考えを出し合う。	○ 出た意見はすべて書き写し班のメンバーにわかりやすく報告する。 考えるポイントを支援する。 質問があれば、その場で出させ内容を深めるよう支援する。
15	ジグソー活動 ジグソー班に再編成し、エキスパート活動で出た考えをそれぞれが説明し、「なぜ、大谷古墳から馬につける冑が出土したのか。」馬かぶと誕生から古墳に納められるまでのストーリーを考える。	○ 班の再編成後(ジグソー班)は、その話の内容を知っているのは自分一人であることを理解させる。 ○ 3つの資料を組み合わせ、質問(本時の課題)の答えを出すように支援する。
10	クロストーク活動 各班でストーリー発表し考えを説明する。	○ 班で協力して、どのような人物が、何のために、どのようにして手に入れ、古墳に納めたのかをおさえる。
5	何班のストーリーが一番本当の歴史に近いと思いますか。その理由も教えて下さい。 自己評価	○ 当時の時代について日本の様子・東アジアの様子・日本と東アジアの関係について理解させる。

備考(クラスの様子、事前に予想される指導上の課題など)

女子生徒が13人男子生徒が5人、と女子生徒の比率が極端に多く、たいへんおとなしいクラスであり、社会科は、覚えることが多いのであまり好きでないという子が多い。中学校での社会の授業(一斉授業)では、一部の生徒の発言があるものの活発な言語活動には至っていない。今回の協調学習でどれだけの変化がみられるかが楽しみである。ただ、学力的に低い子供たち、極端にしゃべらない子など心配な面もあるが、教師の支援で乗り切りたいと考えている。

エキスパート資料 1

東アジアとの関係

課題：「なぜ、和歌山（大谷古墳）からこのような馬につけるよろい（馬胃・馬かぶと）が出土したのか。」馬につけるよろいかぶと誕生から、古墳に納められるまでのストーリーを考えて書いてみよう。

考える視点：日本と朝鮮半島とはどのような関係があったのでしょうか。その際に和歌山はどんな役割を果たした土地だったのでしょうか。

5世紀ごろの東アジア

【5世紀ごろの東アジアの地図】

4世紀から6世紀にかけて、中国では、漢民族の南朝と遊牧民族の北朝に分かれて争いました。朝鮮半島の北部では、高句麗が力をのぼして楽浪郡をほろぼし、南部では百済と新羅にはさまれた伽耶（加羅，任那）地方の小さな国々は、大和王権とのつながりを利用して両国に対抗しました。朝鮮や中国の記録には、4世紀ごろから倭が朝鮮半島の国々と交渉をもったことや、5世紀には倭王が5代にわたって中国に使いを送ったことなどが見られます。

そして、こうした機会に、朝鮮から日本に大量の鉄がもたらされました。当時、日本で

は鉄を作ることができなかつたので朝鮮半島から入手する必要がありました。和歌山県では、紀ノ川下流域を中心に朝鮮半島のから様々な品がもたらされました。和歌山の紀ノ川下流域は、朝鮮半島から大和に船で来る場合、瀬戸内海を通り紀ノ川河口に入港した最終の港であり、同時に大和（奈良盆地）への玄関の一つでもあったからです。和歌山県は、紀伊国＝木の国と言われるほど木材資源が豊富でした。和歌山の古代人は、このような木材資源を加工して船を建造しました。また、すぐれた航海技術ももっていました。その技術を利用して、水軍として朝鮮に出陣したり、和歌山の塩や海産加工品を輸出するなど朝鮮半島とのつながりがありました。

好太王の碑

百済・新羅はもともと高句麗に従っていた。倭は391年以来、海を渡って百済を破り、新羅を従えた。

解説

朝鮮の王朝が残した碑文には、倭が百済と結んで新羅や高句麗と戦ったことが記録されています。また、中国の歴史書には、倭の5人の王が、たびたび中国に使いを送ったことが記録されています。倭の国は、中国の皇帝の力を利用して、高句麗などに対抗しようとしていたと思われます。

【好太王碑 写真】

エキスパート資料 2

渡来人

課題：「なぜ、和歌山（大谷古墳）からこのような馬につけるよろい（馬^{ばちゆう}青・馬かぶと）が出土したのか。」馬につけるよろいかぶと誕生から、古墳に納められるまでのストーリーを考えて書いてみよう。

考える視点：渡来人が和歌山に移り住んだのには、どのような理由があったのでしょうか。馬^{ばちゆう}青が当時の数少ない最新の兵器だとすると、それをどのようにして手に入れたのでしょうか。

【須恵器の写真】

古墳時代、中国や朝鮮の人々が一族でまとまって日本に移り住むことが増えました。これらの人々を渡^{とらいじん}来人といいます。技術者や知識人として招かれた人もありましたが、その背景には、朝鮮半島で戦乱がおきていたことがり国と国の^{こうそう}抗争^{げきか}が激化するなか日本に逃げてきた人たちでした。渡来人は、日本の各地に住んでいて、土木・建築、馬具や金属加工、高級な絹織物、

【金細工や勾玉などの写真】

高温で焼いた質のかたい土器（須^{すえき}恵器）をつくる技術や、漢字・儒教・仏教などを伝え、日本の文化の発展に大きな影響をあたえました。古墳のづくり、
灌^{かんがい}漑、馬具の金メッキを施す金細工の技術など日本にない高度な技術力を持ち、書記・計算といった知識も豊かであったので大和王権の中でも重要な位置

【鉄製品の出土場所地図と、鉄製武器、農具などについての説明】

を占めた者もありました。
和歌山市（紀ノ川下流域）の古墳群の中にも、中国や朝鮮半島と結びつきの強い品々が出土しています。住居跡や古墳の形式から、渡来人が大陸からこの地に渡来して生活していたことがわかっています。

エキスパート資料3

大和王権

課題：「なぜ、和歌山（大谷古墳）からこのような馬につけるよろい（馬冑・馬かぶと）が出土したのか。」馬につけるよろいかぶと誕生から、古墳に納められるまでのストーリーを考えて書いてみよう。

考える視点：朝鮮半島と大和王権はどのような関係にあったでしょう。また、馬冑が出土した大谷古墳に葬られていた人物が大和王権に関係あるとしたら、どのような身分の人物だろうか

土を盛り上げて築いた王や豪族の墓を、古墳とといいます。古墳は、表面には石がしきつめられ、頂上やまわりには埴輪がならべられました。また、内部には棺を納める石室があり、棺には遺体のほか、鏡や剣、武器や武具などが納められていました。特に馬具は、かなり位の高い人物しか所有できず製作も制限されていました。もともと日本には馬はいませんでした。4、5世紀朝鮮半島に進出していた大和王権は、馬を用い高句麗との戦いに苦しんだのをきっかけに馬を飼うようになりました。3世紀の後半から4世紀には、前方後円墳とよばれる大型の古墳が大和(奈良県)地域につくられました。このことからこの地域に強大な権力をもつ王が存在していたと考えられています。そして、この王たちがつくった政権を大和王権とといいます。大和王権の支配者を、中国では倭王、国内では大王とよんでいます。大和王権は、この大王を中心に、大和と周辺の有力な豪族で構成されていました。豪族は、先祖を共通にする氏という集団をつくり、代々決まった仕事でつかっていました。

【前方後円墳の分布と規模を示す地図、出土品の写真など】

学習シート 1

氏名 _____

「なんじゃこりゃ」

【馬冑の写真】

和歌山県大谷古墳出土（大谷古墳は紀ノ川駅下車徒歩15分）5世紀の終わり築造、馬具や武具、豪華な副葬品と共に出土。鉄製で制作が非常に難しく高度な技術を必要とする。

この馬冑は、我が国では、埼玉県將軍山古墳とあわせて2つしか出土していない。中国や朝鮮半島においても出土例は少なく加耶地方で12点、中国東北地方で1点の合計15点である。

高句麗の壁画には、馬冑をかぶった戦闘図がえがかれ、常用の道具として用いられていたことが推測できる。

なぜ、和歌山大谷古墳からこのような馬につける冑（馬冑・馬かぶと）が出土したのか。

<課題1>馬につける冑誕生から、古墳に納められるまでのストーリーを予想してみよう。

自分が担当した「大和王権」・「東アジアの国々との関係」・「渡来人」のそれぞれの面からか自分の考え（予想）を書いてみよう。

氏名

「なぜ、和歌山大谷古墳からこのような馬につけるよろい（馬^ば冑^{ちゅう}・馬かぶと）が出土したのか。」

馬につけるよろいかぶと誕生から、古墳に納められるまでのストーリーを考えてみよう。

<課題2> エキスパート資料にもとづいてグループで話し合ってみよう。

「東アジアの国々との関係」の面から見た考え

学習シート2

氏名 _____

<課題4> 3つの面から、総合的に考えてみて、「なぜ、和歌山大谷古墳からこのような馬につける^{かぶと} 冑（馬^ぼ冑^{ちゅう}・馬かぶと）が出土したのか。」馬につける^{かぶと} 冑誕生から、古墳に納められるまでのストーリーを書いてみよう。

<課題5> 何班のストーリーが一番本当の歴史に近いと思いますか。その理由も教えて下さい。

班・理由

【新しい学びプロジェクト】ジグソー法を用いた協調学習授業 授業案

学校名：筒賀中学校

授業者：亀岡圭太

教材作成者：亀岡圭太（原案：津奈木考嗣）

授業日時	平成23年7月1日	教科名	理科
学年	1学年	児童・生徒数	6名
単元（題材）	身近で起こる不思議な現象 （光・音・力） 身のまわりの物質	本時／全時数	

授業のねらい
ジグソー法による学習を通して、状態変化や大気圧について理解し、それらを関連付けて考えさせる。
授業の柱となる課題（ジグソー活動の課題）
少量の水を入れて加熱した空き缶にふたをして冷やすとどうなるか、理由をつけて予想しよう。
課題に対して出してほしい答え（課題について子どもたちに語ってほしいストーリー）
・少量の水を入れて加熱した空き缶内では、水が状態変化し、水蒸気になる。水から水蒸気に状態変化することで体積が増え、空き缶の中は水蒸気だけになる。その後、ふたをして、冷やすと水蒸気は再び水に変化する。水蒸気から水に変化する時、体積が減るが、ふたをしたため、外から入ってくるものがなく、空き缶の中は真空状態になる。真空状態になったことで、空き缶の中の圧力と空き缶の大気圧に差が生じ、大気圧のほうが大きいので、空き缶はつぶれる。
各エキスパート（答えを出すための部品）
<各エキスパートの資料内容・課題・つかんでほしいキーワードなどを書いてください>
・状態変化（状態変化によって体積が変わる） ・真空（空気もなくなる状態がある） ・大気圧（地表にあるものは大気圧の影響を受けている。）
ジグソー活動でわかったことを踏まえて取り組ませたい発展的な課題（なしでも可）
湯を入れてたペットボトルをふり、その後、ふたをして水で冷やすとペットボトルはどうなるか、理由をつけて予想しよう。
グループ編成
エキスパート活動：3人×3グループ ジグソー活動：3人×3グループ （生徒が足りないので、教職員で補充する。）

学習活動のデザイン

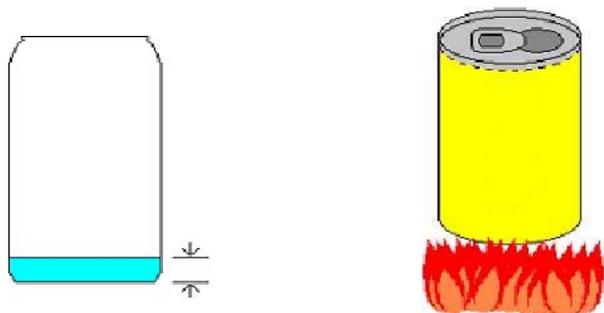
時間	学習活動	支援等
授業前	各自で課題について考える。	
4	1. 課題の確認をし、お互いの予想を交流する。	・前時のワークシートを集めておき、実物投影機でテレビに映しながら確認する。
少量の水を入れて加熱した空き缶にふたをして冷やすとどうなるか、理由をつけて予想しよう。		
	予測される生徒の意見 ・つぶれる 理由：「大気圧」「わからない」「熱」 ・破裂する 理由：「分からない」 「急激に冷やされるから」	
1	2. 授業の流れを確認する。	
15	3. エキスパート活動 グループに分かれ、それぞれの実験や資料について理解する。 (A : 大気圧 B : 真空 C : 状態変化)	・安全面に配慮し実験をさせる。 ・資料の内容をしっかりと把握するよう指示する。 ・短時間で実験ができるよう準備しておく。
15	3. シグソー活動 グループを変え、エキスパート活動の資料について説明した後、課題について考える。	・考えがまとまらないようであれば、補助のワークシートを渡す。
5	4. クロストーク それぞれのグループの意見を交流する。	・筋道だて、分かりやすく説明させる。
5	5. 解答 課題の実験を見て、原因を理解する。	・短時間で実験ができるよう準備しておく。 ・クロストークで出た生徒の意見を使ってまとめを行う。
5	5. 確認と感想	
湯を入れたペットボトル湯をふり、その後、ふたをして水で冷やすとペットボトルはどうなるか、理由をつけて予想しよう。		
	各自で確認問題を解き、感想を書く。	

備考 (クラスの様子, 事前に予想される指導上の課題など)
物質が粒 (分子) でできていることについては, 事前に指導しておく。

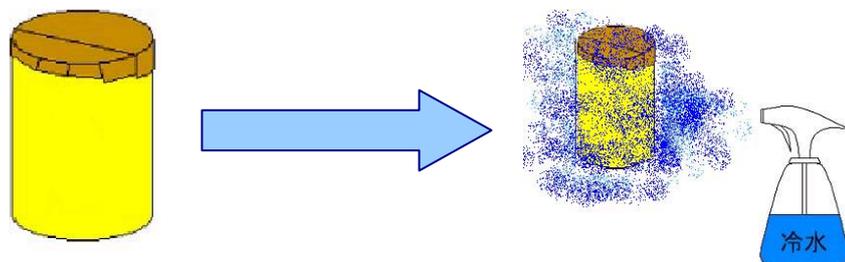
事前ワークシート

次のような実験をします。

①水を少し入れた空き缶を、ガスバーナーで加熱します。

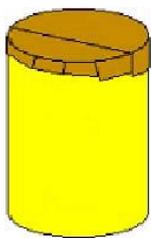


②加熱した缶にふたをし、霧吹きで冷水をかけ、一気に冷やします。



予想

空き缶はなるでしょうか？



[]

理由

[]

ワークシート

名前()

問い 空き缶はようになるだろう？ エキスパート活動で学んだことを参考に、もう一度予想を吟味してみよう

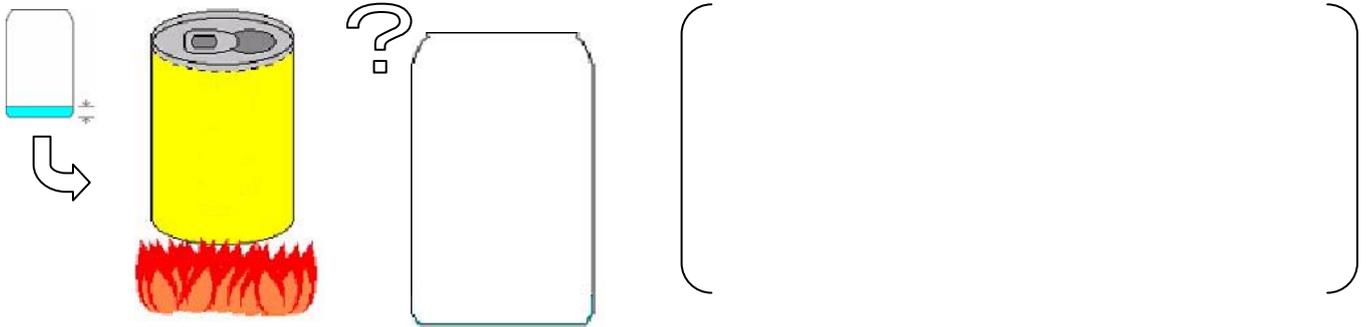
空き缶はようになるだろう？ []

理由を考えよう。 []

補助ワークシート(次の順番で考えてみましょう。)

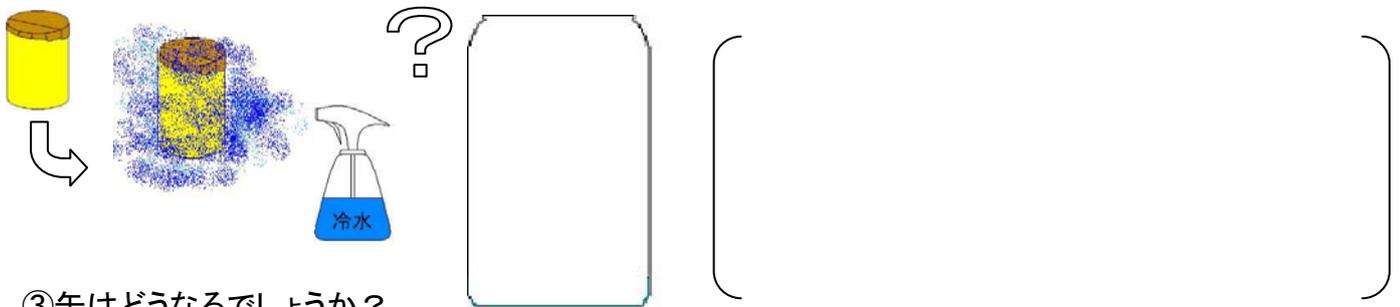
①水を少し入れた空き缶を、ガスバーナーで温めます。

(問い) この時、缶の中では何が起こって、どのような状態になっているのでしょうか？



②温まった缶にふたをし、霧吹きで冷水をかけ、一気に冷やします。

(問い) この時、缶の中は何が起こって、どのような状態になっているのでしょうか？



③缶はどのような状態になるのでしょうか？

(問い)なぜ、そう思いますか？



事後ワークシート

確認問題

次のような実験を行いました。

- ①ペットボトルの中に、少量のお湯をいれてよくふります。
- ②その後、しっかりふたをして、ペットボトルに水道水をかけます。

ペットボトルはどのようなでしょう？理由も説明してみよう。

[]

☆今日の授業はたのしかったですか（あてはまるところにマルをつけてください）

5. とてもたのしかった
4. たのしかった
3. たのしくもつまらなくもなかった
2. つまらなかった
1. とてもつまらなかった

☆今日のような進め方の授業(グループでの話し合いを中心にした授業)をまたやりたいですか（あてはまるところにマルをつけてください）

5. とてもやりたい
4. やりたい
3. やってもやらなくてもよい
2. やりたくない
1. まったくやりたくない

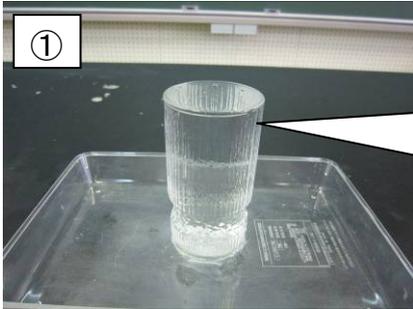
今日の授業の感想を書こう。

[]

名前()

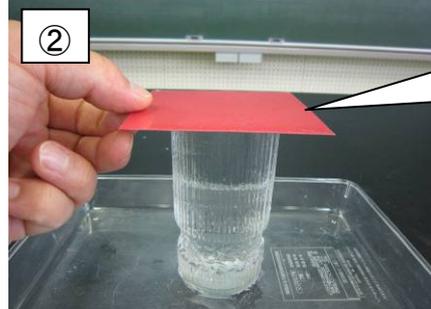
実験

次のような実験をしてみるとどうなるでしょう？理由も考えてみよう。



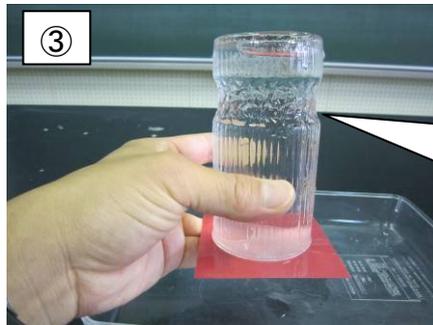
①

コップに水を
いっぱいまで
入れます。



②

シートをのせ
ます。



③

シートを押さえ、ひっくり
返します。その後、シー
トから手をはなします。
どうなるでしょう？

結果 ()

理由 ()

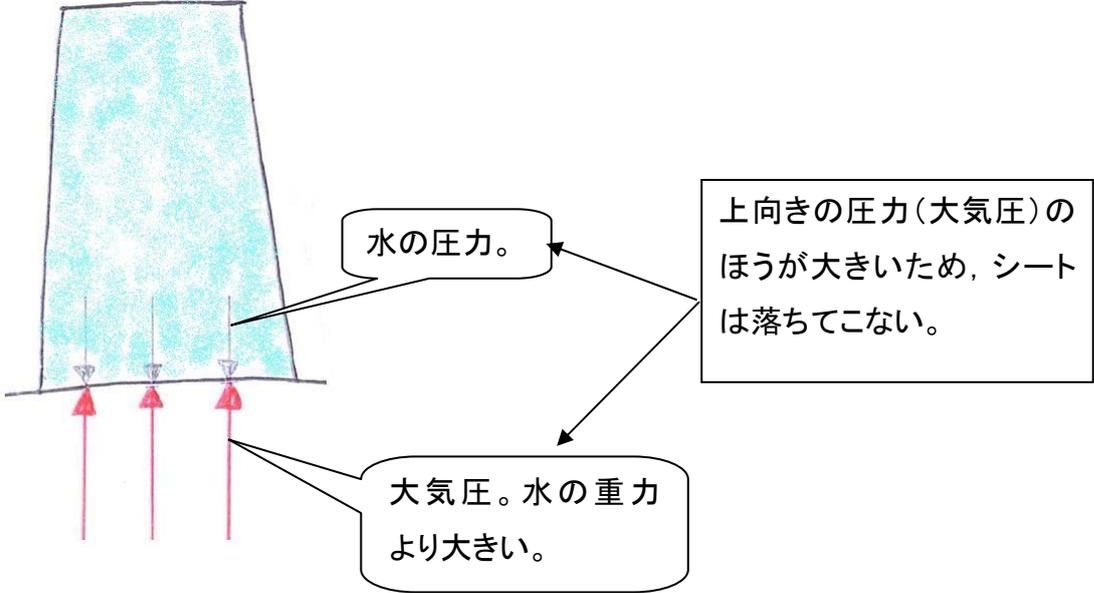
実験をして、理由を3人で考えたら、お互いの意見を交換しよう。
それが終わったら、裏面の解説を読んで、みんなで理解しよう！

解説

この実験をすると、シートは落ちません。

これは大気圧が原因です。大気圧とは空気からの圧力のことです。空気には重さがあるため、空気は地球の重力に引っ張られます。そのため、地表にあるものは、すべてこの空気の重さによる圧力をあらゆる方向から受けます。

この実験では、水の重さよりも大気圧がシートを押す力のほうが強いため、シートは落ちないのです。

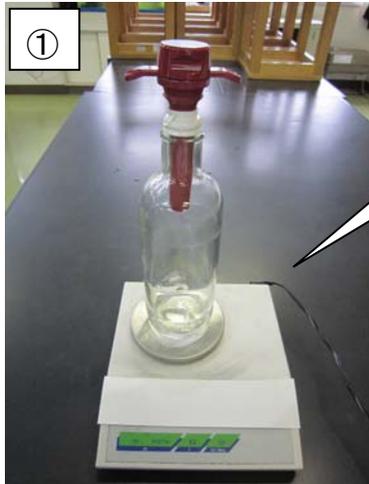


なお、大気圧は空気があるところではたらきます。空気がない場所では、大気圧ははたらきません。

名前()

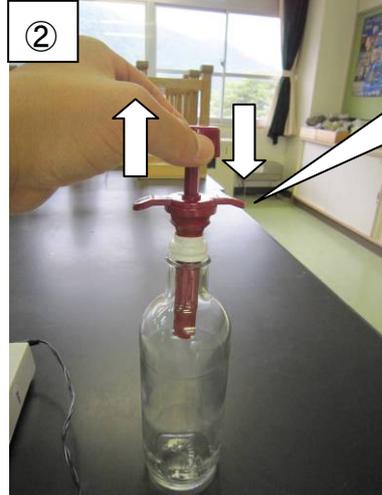
実験

次のような実験をすると全体の質量はどうなるでしょう？理由も考えましょう？



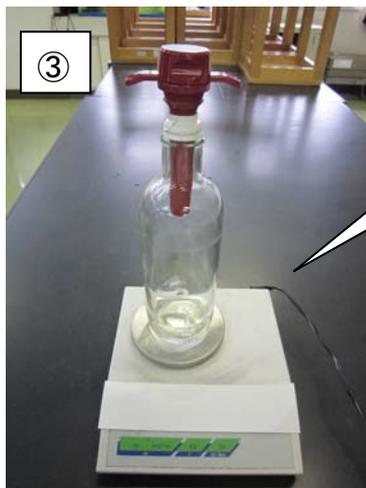
①

全体の質量をはかろう。



②

ポンプを上下さしましょう。



③

再び全体の質量をはかろう。

結果 ()

理由 ()

実験をして、理由を3人で考えたら、お互いの意見を交換しよう。
それが終わったら、裏面の解説を読んで、みんなで理解しよう！

解説

この実験を行うと、実験前に比べ実験後は質量が小さくなります。

これは、ビンの中の空気がなくなったからです。つまり、ビンの中は空っぽになったのです。空っぽといっても、ジュースを飲んだ後のビンが空っぽとは違います。ジュースを飲むとき、ジュースが出て行くと、空気が入ってきます。この実験では、ビンの中の空気が出て行っても、何も入ってきません。そのため、ビンの中には何もない状態(空気すらない)なのです。

真空という状態です。



空気には質量があります。そのため、空気がなくなると全体の質量も小さくなるのです。

理科エキスパート資料C

名前()

実験

次のような実験を行うとふくろはどうなっただろう？また、それはなぜだろう？



①
ホットプレートでお湯を沸かします。



②
袋の中には少量のエタノールが入っています。袋がしっかりしまっていることを確認しましょう。



③
お湯が沸いたら、安全めがねをかけ、袋をお湯につけます。袋はどうなるでしょう？

結果

理由

実験をして、理由を3人で考えたら、お互いの意見を交換しよう。

それが終わったら、裏面の解説を読んで、みんなで理解しよう！

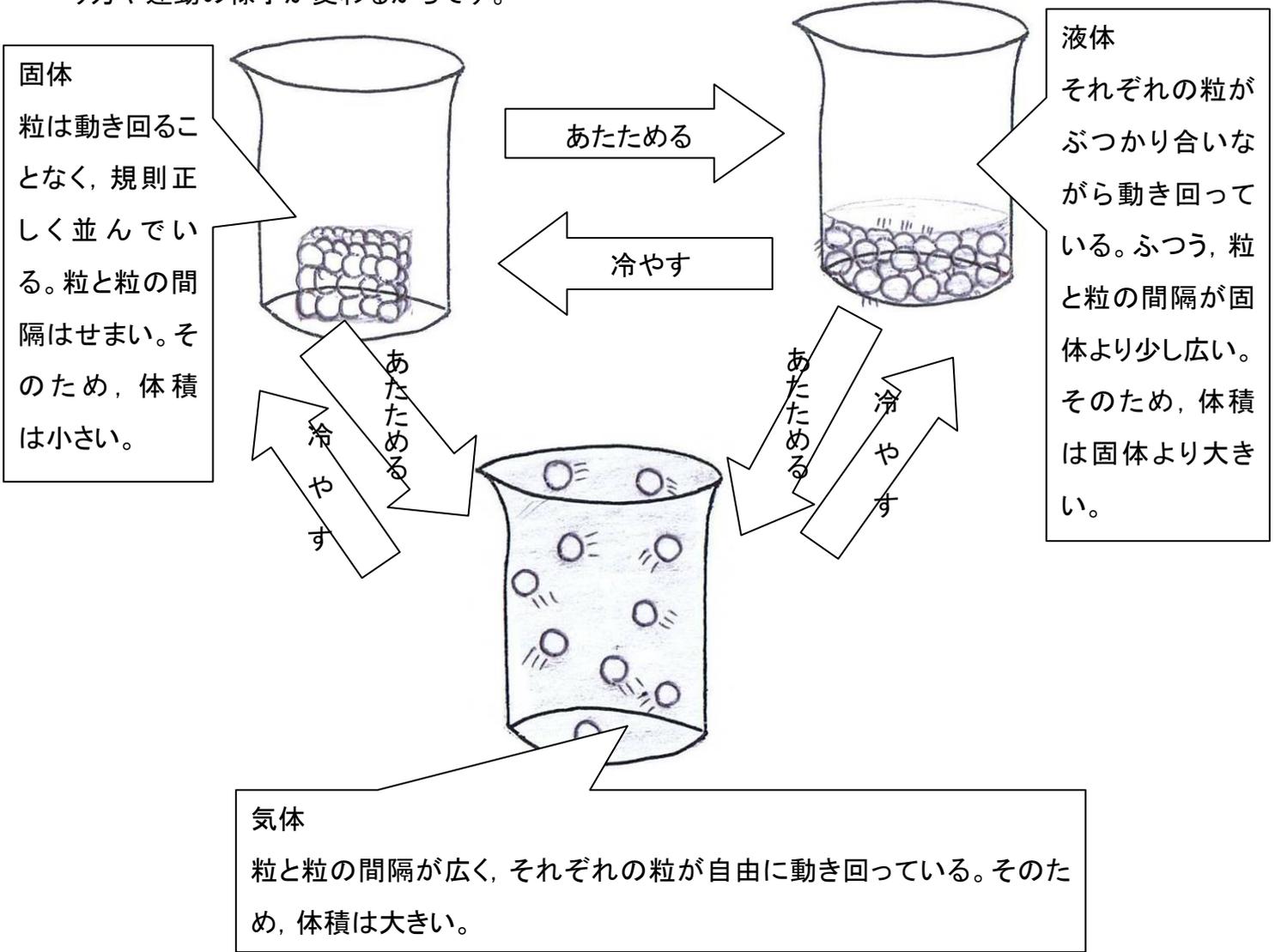
説明

実験を行うと、袋はふくらみます。

これは、状態変化によって体積の変化が起こったからです。

状態変化とは、温度や圧力を変えることで、物質の状態(固体、液体、気体)が変化することです。例えば、水(液体)を冷やすと氷(固体)になったり、水(液体)を温めると水蒸気(気体)になったりする変化のことです。

状態変化が起きるとき、物体そのものは変化しません。しかし、体積の変化が起こります。一般的に固体から液体になる、液体から気体になるとき体積は増えます。反対に、気体から液体、液体から固体になるとき体積は減ります。これは、物質の粒の集まり方や運動の様子が変わるからです。



この実験では、エタノールを温めることで、エタノールが液体から気体に変わり、その際、体積が増えたため、ふくらがふくらんだのです。

【新しい学びプロジェクト】ジグソー法を用いた協調学習授業 授業案

学校名： 南山田小学校

授業者： 恒任 珠美

教材作成者： 恒任 珠美

授業日時	平成 23 年 9 月 8 日	教科名	国語科
学年	第 1 学年	児童・生徒数	11 名
単元（題材）	問いと答えの関係に気をつけて説明の文章を読む。 (だれがたべたのでしょうか) 教育出版 1 年 (上)	本時/全時数	2/5

授業のねらい
写真と文章を関連づけることにより、問題事象を正確に把握させ問いに出合わせる。問いに呼応した答えを文章や写真を手掛かりに読みとる事でその表現方法の基礎を培う。
授業の柱となる課題（ジグソー活動の課題）
食べたあとを見ると何がわかるのかを話し合ひましょう。
課題に対して出してほしい答え（課題について子どもたちに語れてほしいストーリー）
穴のあいたクルミの殻や芯だけになった松ぼっくり、ちぎれた木の葉など食べたあとをよく見ると、どんな動物が暮らしているのかがわかる。
各エキスパート（答えを出すための部品）
<各エキスパートの資料内容・課題・つかんでほしいキーワードなどを書いてください>
【エキスパートA】（芯だけになった松ぼっくりとリス） 本文P103～P104（誰が松ぼっくりを食べたのか）を読み取る。 ・しんだけになった まつぼっくりが、おちています。⇒写真 <u>だれが、まつぼっくりを たべたのでしょうか。</u> （お尋ねの文） ・りすが、まつぼっくりを たべたのです。 （答えの文）
【エキスパートB】（ちぎれた木の葉とむささび） 本文P105～P106（誰が木の葉を食べたのか）を読み取る。 ・ちぎれた 木のはが、おちています。⇒写真 <u>だれが、木のはを たべたのでしょうか。</u> （お尋ねの文） ・むささが、木のはを たべたのです。 （答えの文）
ジグソー活動でわかったことを踏まえて取り組ませたい発展的な課題（なしでも可）
グループ編成
【エキスパートA】 本文P103～P104（誰が松ぼっくりを食べたのか）を読み取る。（5人）
【エキスパートB】 本文P105～P106（誰が木の葉を食べたのか）を読み取る。（5人）
【ジグソー活動】 A1、A2、A3、B1、B2（5人） A4、A5、B3、B4、B5（5人）

学習活動のデザイン（単元全体の計画）

時間	学習活動	支援等
1/5	<p>学習計画を立てる。</p> <p>本文P100～P102 穴のあいたクルミとねずみ (誰がクルミを食べたのかを読みとる)</p>	<p>○「なにがかくれているのでしょうか」の学習を想起する。</p> <p>○初めてのジグソー活動なので、学習の仕方を知る。</p> <p>○穴のあいたクルミの写真と問いの文を関連付けて問題を把握する</p> <p>○誰がクルミを食べたのか、ワークシートを使って全員で読みとる。</p>
2/5	<p>1 課題の把握 前時の学習を振り返り、学習の仕方を知る。 ・ 誰が食べたのでしょうか</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>食べたあとをみると、どんなことがわかるだろう？</p> </div> <p>2 資料の読み取り（エキスパート）</p> <p>【エキスパートA】 本文P103～P104（誰が松ぼっくりを食べたのか）を読み取る。</p> <p>【エキスパートB】 本文P105～P106（誰が木の葉を食べたのか）を読み取る。</p> <p>3 読みとったことの説明 自分が読みとったことを、ワークシートを使って友だちに説明する。</p> <p>児童の解答予想 A：しんだけになった まつぼっくり りすが、まつぼっくりをたべたのです B：ちぎれた木のは むささびが、木のはをたべたのです</p>	<p>○ 2つのグループに分かれて、ワークシートを使い、クルミの文章と同じように読みとっていくことを知る。</p> <p>○ 写真と文章を関連付けて問題を把握する。</p> <p>○ それぞれの、読み取り箇所だけが確認できるように、エキスパートの資料として教科書の本文を切り取ったものを配付する。</p> <p>* 補足説明は、省略してもよいことにする。</p>

	<p>4 シグソー活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シグソー活動でお互いの読みとりを出し合う。 ・自分が担当した文章を読み、誰がどんなふうに食べたのかを発表する。 ・みんなで読みとった『穴のあいたクルミ』と自分たちで読みとった『芯だけ残った松ぼっくり』『ちぎれた木のは』の2つをもとに <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>たべたあとをみると どんなことがわかるのか</p> </div> <p>を話し合う。</p> <p>結論の落とし所</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>食べたあとをよく見ると、どんな動物が暮らしているかがわかる。</p> </div> <p>5 クロストーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれのシグソー班でまとめた意見について発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ シグソー活動に入る前に、再度学習課題を確認する。 ○ ここでも、ワークシートを用意して、答えをまとめやすくする。
3/5	<p>1 だれがたべたのでしょうかの全文をみんなで読んでお尋ねの文と答えの文をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お尋ねの文 ・ 答えの文 ・ 補足説明 	<ul style="list-style-type: none"> ○ お尋ねの文と答えの文が呼応していることつかませる。
4/5 5/5	<p>1 お尋ねの文と問いの呼応した、簡単な説明文を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本や図鑑を使って調べる。 	

児童・学級の実態

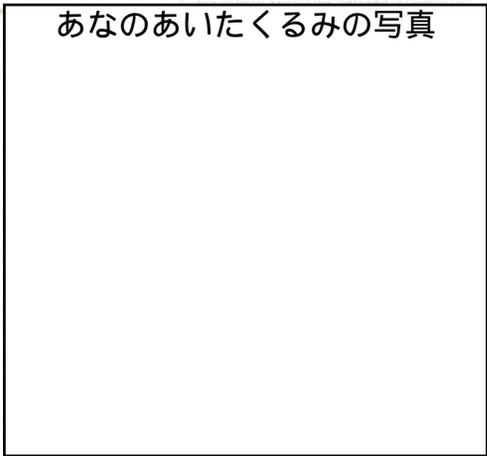
1学期に「なにが かかれていますのしょう」の説明文に出合うという形で学習した子どもたちであり、入学後2つ目の説明文教材である。

また、「お尋ねの文」「答えの文」という表現も学習したばかりである。

さらに、シグソー活動での学習は初めてである。また、1年生の2学期という時期であり、自分の考えを友だちにわかるように伝えるということや、自分が知らない文章について友だちの考えを聞きとるといったことが、まだ難しい児童も多い。そこで、まず、全員で、学習の仕方・ワークシートの書き方について学習した後に【エキスパートA・B】の2つにわかれて学習を進める。こうすることで、自分が読みとったことを友だちに発表し、友だちが読みとったこと1つについて聞くという活動に取り組みたい。

だれが たぐたのじょう

あなの あいた くるみの からは おちします。



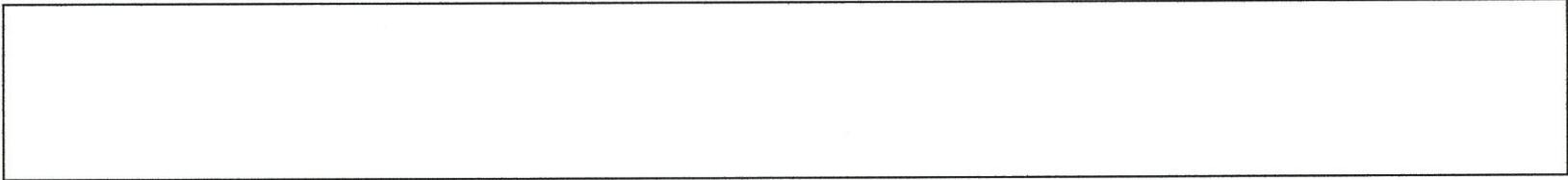
だれが、くるみを たぐたのじょう。

ねずみが、くるみを たぐたのじょう。

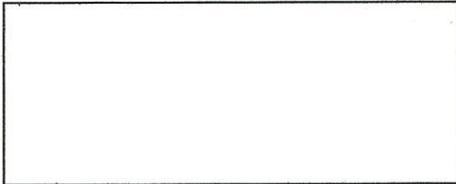
ねずみは、からに あなを あけて、なかみを たぐます。



なにが おちていきますか。

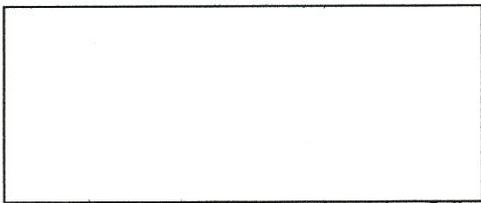


だれが、



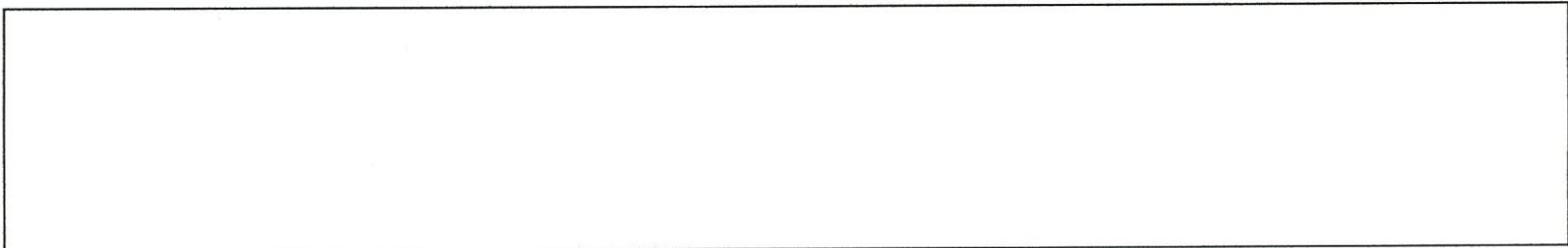
が

なにを



たぐたのじょう。

どうなるかに たぐますか。

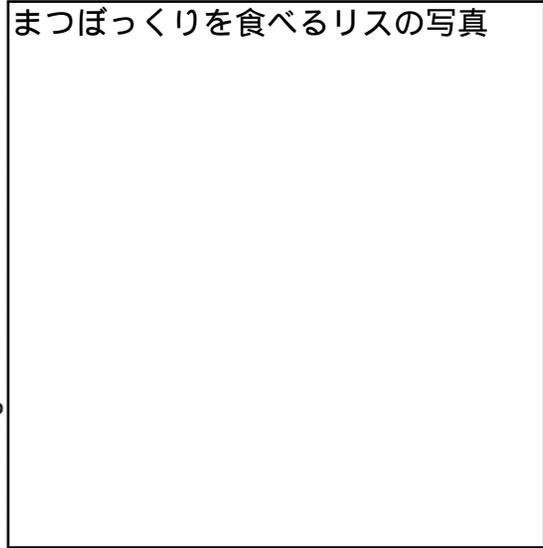


だれが たぐたのじょう

しんだけに なった まつぼっくりが、おちし りす



芯だけになったまつぼっくり
の写真



まつぼっくりを食べるリスの写真

だれが、まつぼっくりを たぐたのじょう。
りすが、まつぼっくりを たぐたのです。
りすは、しんをのこして、たねだけを たぐます。

なにが おちていますか。

だれが、

が

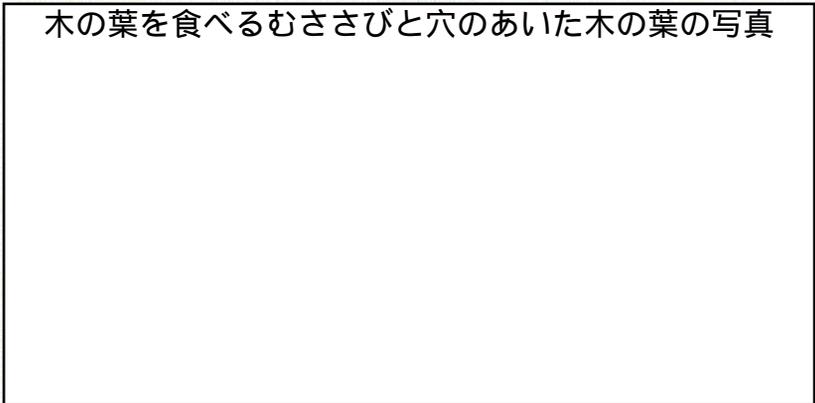
なにを

たぐたのです。

しんをのこして たぐますか。

だれが たぐたのじょう

ちぎれた 木のはが、おちて います。



だれが、木のはを たぐたのじょう。

むささびが、木のはを たぐたのじょう。

むささびは、木のはの はんぷんを かみきって たぐます。

はの まんなかだけを たぐる ことも あります。

なにが おちて いますか。

だれが、

が

なにを

たぐたのじょう。

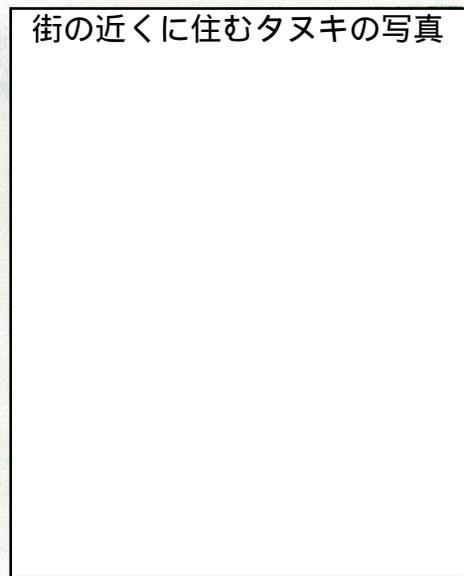
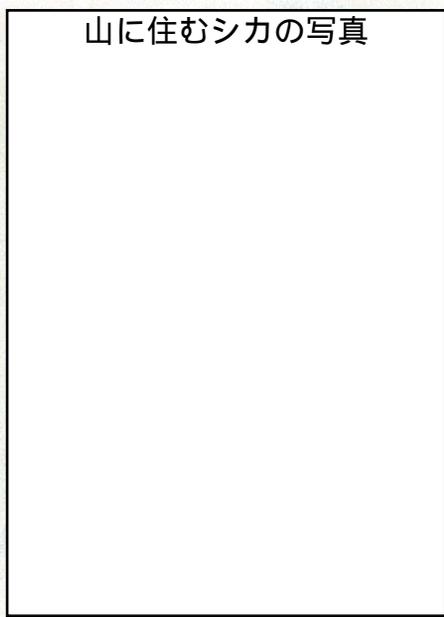
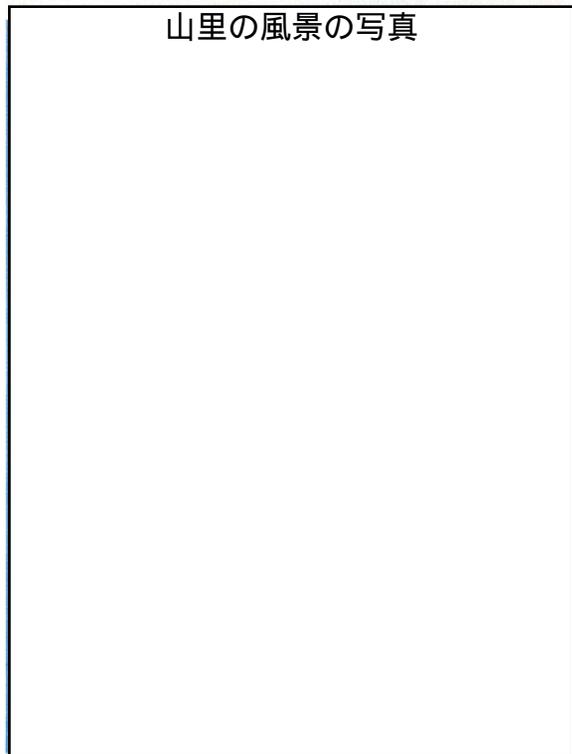
どんなふうに たぐますか。

たれが たぐたのじもん

山や もりでは、いろいろな たぐあとが みつかります。
たぐあとを よく みると、どんな どうぶつが くらして いる
かが わかります。

《このおはなしでは

たぐあとをみると どんなじものが わかると かんじますか》



市町における研究推進 <宮崎県五ヶ瀬町>

(1) 基本的な考え方

右のモデルに示すように、小規模校を多く抱える本町独自の授業システムとして、学校・学級の壁を越えて、教える内容に最適な学習集団で行う「G授業」がある。ただ、全ての授業をG授業で行うのではなく、「G授業」に効果のある内容で行うものである。G授業は新しい授業システムとして一定の方向を示すことができつつある。

しかし、G授業は指導方法の工夫改善及び教員の資質向上を目的としたものではない。そこで東京大学が小・中・高等学校に大学から生まれる新しい考え方を発信し、各学校における授業やG授業に

における教育の質を高めることを目標に、大学発教育支援コンソーシアム推進機構（以下 CoREF）を設立したことを受け、五ヶ瀬町では、CoREF と共に授業改善及び教員の資質向上を目的に、授業実践を行うこととした。このことによって、五ヶ瀬町の学校現場では、授業システム、授業方法の両方が確立することが期待された。

(2) 本町における研究推進の実際

町内における研究実践の取組の充実に向けて、次の3つの取組を行った。

① 「協調学習の考え方を取り入れた授業」づくりに向けた職員研修の充実

平成21年度導入当初は、CoREFに講師派遣を依頼し、理論についての講義及びワークショップ型の研修会を開催した。そのための費用として学力向上に係る文部科学省委託事業等と関連させ、予算化した。さらに、本町で行う研修会を広く近隣の自治体にも呼びかけ、協調学習の研究を他の自治体とも連携して進めるようにした。こうした中で、協議も深まり研修の充実を図ることができた。

また、新しい学びプロジェクトによる研究推進員による実践化が進んできた本年度からは、町内組織を生かし、研究推進員を中心とするワークショップ型の研修会を長期休業期間中に設けた。その研究会では、学年毎に実践化に向けての指導計画の立案等も行い、4教科以外の教科・領域における実践化に向けてのイメージを共有することができた。

② 授業実践に向けての取組と研修会の開催

平成21年度・平成22年度五ヶ瀬教育ビジョン全体研究会を開催し、多くの参加者から意見をいただく機会を設けた。授業づくりに向けては、授業者のみならず関係学年担任や関係管理職及び町教委担当も含めて、数回に渡り事前協議を行った。また、導入当初の平成21年度は、前



述の事業費を用いて授業者等を直接CoREFに出張させ、エキスパート資料作成に向けての打合せに時間をかけた。こうした授業づくりに向けた全町を挙げての事前協議の中でも、職員の意識を高めることができた。

また、全体研究会における授業研究会での協議を踏まえ、次年度の実践化に向けてのエキスパート資料やプランの修正を行うことができ、より充実した授業実践の継続に寄与することができた。

このような全体研究会のみならず、研究推進員による授業実践についても、町内組織を生かし全校に周知し、関係職員が参観及び授業研究を実施するなど、少しずつ実践を積み重ねている。その中で、協調学習の考え方を取り入れた授業づくりに適した学習内容についても、徐々にではあるが共通理解できつつある。

③ 研究推進のための町内研究体制の構築

本町における協調学習の考え方を取り入れた授業づくりの研究推進を図ることと理論構築を目的に、本年度より右図のように五ヶ瀬教育ビジョン研究組織に「協調学習研究部会」を新たに設けた。構成は、各小中学校から1名ずつのメンバーで、管理職の代表として教頭1名が各学校間及び管理職とのパイプ役として関わることにした。研究推進が一部の職員に限定されないように、新しい学びプロジェクトにおける研究推進員以外の職員も含むことにした。

本部会は、他の部会同様、年間6回の作業部会Ⅱとし

て開催され、本町における実践化の中核的な役割を担った。長期休業期間には、研修会を企画したり、授業づくりの支援を行ったりと精力的に活動した。

(3) 成果と課題

本部会の年度末評価では、重点実践課題であった「実践の積み重ね」について「A」評価となっており、所期の目的を達成しつつある。しかし、本町におけるG授業との関連や授業づくりに向けての支援体制など克服しなければならない課題も確認され、次年度に引き継いで解決にあたる。

平成22年度五ヶ瀬教育ビジョン全体研究会 第二次ご案内

今年の五ヶ瀬は「授業」で魅せます！！

G授業は小人数にこだわり、
協調学習の授業は半ひ合いにこだわる

五ヶ瀬教育ビジョン全体研究会

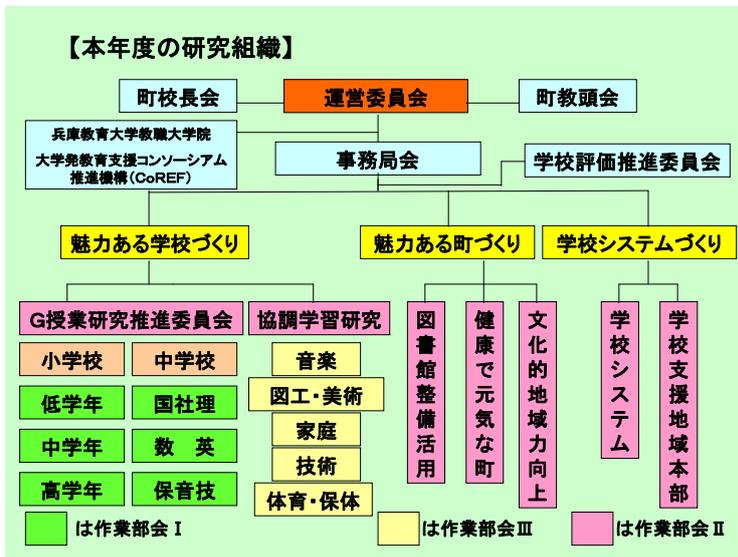
日時: 平成22年11月19日(金) 9:15~16:15
 場所: 五ヶ瀬町立三ヶ所中学校
 主催: 五ヶ瀬町教育委員会
 共催: 五ヶ瀬町・宮崎県教育委員会
 大学発教育支援コンソーシアム推進機構(CoREF)
 後援: 兵庫教育大学



大学発教育支援コンソーシアム推進機構ワークショップ in 五ヶ瀬
テーマ「あなた自身が協調学習を体験してみませんか？」

日時: 平成22年11月20日(土)9:30~12:00
 場所: 五ヶ瀬町 町民センター 大ホール
 主催: 大学発教育支援コンソーシアム推進機構
 共催: 五ヶ瀬町教育委員会





市町における研究推進 <大分県竹田市>

1 竹田市の概要

大分県竹田市は熊本県や宮崎県と隣接する山間部にあり、平成17年1市3町が合併したが、平成22年現在、人口約2万5千人、小学校13校（児童数約950人）・中学校6校（生徒数約500人）と過疎に悩む市である。小学校は13校中6校が複式を有する小規模の学校ばかりである。田舎の子どもらしく素直で優しい反面、人とのかかわりが少ないためかコミュニケーション能力の乏しさが叫ばれている。地域は学校に協力的であるが、一昔前のような教育力が保たれているとは言い難い。教職員（約200人）は急激な教育改革にとまどいながらも、目の前の子どもたちに生きる力をつけなければと真摯に実践に取り組んでいる。

平成22年より竹田市教育委員会は地域の特性を活かし、教職員・保護者・地域・行政みんなですすめる教育をめざした「竹田市教育のまち TOP 運動 (Try Original Project)」を提唱し、その推進を図っている。「協調学習 (ジグソー法)」はその一つの取組として、全小・中学校で進めるべき教育方法として掲げ、取り組んでいる。

2 プロジェクト参加の経緯

全国学力・学習状況調査や PISA 調査から見える日本の子どもたちの課題と同様、竹田市の子どもたちにおいても学習意欲の低下、基礎的な知識および活用力の不足が見られる。更に学びの基盤である生活面に目を向けると小規模校の多い竹田市では人間関係の固定化、多様な思考や価値観を共有する体験の不足、人間関係調整力に係るコミュニケーション能力の不足、中学校での不登校生徒の増大等の課題があげられる。原因の一つとして旧態依然とした教師主導の授業や一部の子どもですすすめられる授業展開等がある。

上記のような課題を克服するためには、子ども主体の授業を増やし、子どもの学びの質を高めることが重要である。言語活動および体験活動を取り入れた子どもが意欲的に取り組む授業、全員の子どもが参加する授業、「わかった」「できた」と子どもが納得する授業、子どもの声でつくる学びあいのある授業を展開し、グローバル化がすすむ今日、竹田市の子どもたちにも社会に出ても他者と交わり、お互いの価値観を受容しあい、それぞれの異なる意見や考え・アイデアなどを交換し、ともに思考し、協力・協働しながら課題を解決したり、新しいものを生み出したりしながら社会貢献できる力をはぐくむ必要がある。その一つの方法として「協調学習」が竹田市の教育施策の一つとして位置付いた。

3 協調学習研究の取組

協調学習が多様な教科・領域で幾度となく展開されることで、子どもたちに上記のような力がついていくと考える。そのためには、協調学習の手法を全ての教師が知って、とにかく実践してみることをめざす必要がある。そこで、1年目・2年目は「強調学習について知る」3年目以降は「実践する」ことを目標に取組をはじめた。

(1) 1年目・2年目「協調学習について知る」の取組

① 1年目（平成22年）の取組

愛知県高浜市

基本データ（平成 23 年度）

人口	43,482 人	面積	1.3 km ²	学校数	小学校 5 校・中学校 2 校
思いやり、支え合い、手と手をつなぐ大家族たかはま。愛知県のほぼ中央に位置し、「三州瓦」の産地としても有名。日本最大の瓦の産地。				児童・生徒数	児童 3024 名・生徒 1456 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 156 名・197 名 中学校 86 名・103 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	岸上 善徳		参加年度	平成 23 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	平岡香澄教諭 国語・中学校	間瀬智広教諭 社会・小学校			
研究推進担当者	鈴木 剛		これまでの協調学習 実践数 (おおよその数)	公開研究授業 2 回 その他(推進員) 2 回 その他(全教員) 4 回	
プロジェクトに関する問い合わせ先			8		
TEL 0566-52-1111(345) Eメール gakkou@city.takahama.lg.jp					

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

知識注入型の授業が多く、子どもたちが、「考え、判断する」場面、すなわち人間が人間として生きていくために必要な「考え、判断する力」を育む場面が設定されていない授業が少なくない。このようなことを考えていた時に知ったのが、本プロジェクトが推し進める協調学習という手法である。学校教育現場において、そうあってほしいと願う子どもたちの姿を、意図的に引き出すことのできるこの学習法に取り組みたいと考えるに至った。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

今年度は、研究推進委員から在籍校の先生方にこの学習法を知ってもらい、この学習法による子どもたちの姿を見てもらうことに主眼をおいた。活性化した授業。主体的に課題に取り組み、仲間とかかわろうとしている子どもたちの姿、人ごとでなく自分のこととして聴こうとする姿、建設的な発言をする姿等が見られ、先生方に、教材研究ごと、このような子どもたちの姿を引き出すことのできるような授業を構想しなければならないという思いをもってもらうことができたと考える。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

本年度は小学校 1 校、中学校 1 校にそれぞれ研究推進委員を 1 名ずつ配置した。研究推進委員による協調学習の授業を市内教職員への公開授業と位置づけ、市内の先生方に協調学習による授業を周知した。さらに研究推進委員の授業に学び、また、研究推進委員が指導者になって、協調学習の授業が構想・実践された。研究推進委員以外の教師によって、今年度は社会、数学、理科、体育の授業が実践された。参加 2 年目となる来年度はさらに市内の先生方への周知と、授業構想、実践をふくらませていきたいと考えている。

兵庫県加西市

基本データ（平成 23 年度）

人口	47491 人	面積	150.95 km ²	学校数 16	小学校 11 校/中学校 4 校/特支 1 校
加西市は播州平野の中央に位置し、古くから交通の要衝である。教育では「新しい時代を切り拓くこころ豊かな人づくり」を目指している。				児童・生徒数	児童 2543 名・生徒 1381 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 191 名・200 名 中学校 142 名・146 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	永田 岳巳		参加年度	平成 23 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	多田教諭 国語・小学校	高井教諭 算数・小学校			
研究推進担当者	塩見 善則		これまでの協調学習	公開研究授業	3 回
プロジェクトに関する問い合わせ先	0790-42-3723		実践数 5	その他(推進員)	回
			(おおよその数)	その他(全教員)	回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

兵庫教育大学の日渡教授より CoREF の取り組みの紹介があり、加西市の子どもたちのコミュニケーション能力向上・学力向上に効果があると判断し参加した。

小中学校における授業の更なる充実と不登校対策が課題である。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

本市は 23 年度からの参加であるが、推進員を中心に小学校の国語と算数で取り組んだ。協調学習では児童の反応は大変良く、効果的と思われるが、授業の段取りにまだまだ時間を要する。ただし、推進員は意欲的に取り組んでおり、授業力向上につながっていると思われる。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

現在は、二人の研究推進員が所属する学校を中心に研究活動を展開している。徐々に、その二校では研究グループやサポート体制が整いつつある。

本年度、上記の二校では、校内研修として、「協調学習」を取り上げ、研究授業やジグソー活動の講習を実施した。

来年度は、研究グループの拡大と活動の充実に取り組んでいきたい。

和歌山県有田市

基本データ（平成 23 年度）

人口	31,416 人	面積	36.92 km ²	学校数	小学校 7 校・中学校 1 校
日本一古い稲荷神社、徒歩漁法による鵜飼、有田みかんや太刀魚の水揚げ量全国一を誇る箕島漁港等、黒潮かおる文化の市である。				児童・生徒数	児童 1,679 名・生徒 908 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 123 名・3 名 中学校 80 名・7 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	田中 政彦		参加年度	平成 22 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	高垣和生教諭 社会・中学校	南畑好伸教諭 社会・中学校			
研究推進担当者	指導主事 福田 孝		これまでの協調学習	公開研究授業 2 回	
プロジェクトに関する問い合わせ先			実践数	その他(推進員) 回	
電話 0737-83-1111			(おおよその数)	その他(全教員) 回	

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

平成 22 年 2 月に東京大学で実施された「CoREF との研究連携第 1 回連絡協議会」に出席し、本プロジェクトの趣旨に賛同した。協調学習は、平成 18 年度の教育基本法の改正に始まる教育改革への対応と、本市の課題である児童生徒の自尊感情を高める上で非常に効果的であると考えた。さらに、9 市町が連携をとりながらプロジェクトに参画することによる相乗効果が期待できたことから、参加するにいった。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

平成 22 年度の研究推進員は、高垣教諭 1 名であったが、隣接する有田川町に勤務する面矢教諭と共同して研究に取り組み、公民的分野における実践を行った。平成 23 年度は、高垣教諭に加え、中学校社会科研究推進員として南畑教諭が参加し、2 人体制で研究に取り組んだ。そして、11 月に南畑教諭が、12 月に高垣教諭が公開研究授業を実施した。南畑教諭の公開研究授業では、停滞しがちなクロストークを活発にするために発問を工夫した。高垣教諭の公開研究授業では、今まで取り組んだ授業の反省から、生徒が学びに向かう意欲を高めるように、授業デザインや各活動に工夫を加えた実践を行った。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

本市は、中学社会科を重点的に研究した。その結果、社会科における協調学習のめざす方向性が明らかになってきた。来年度は、小学校において協調学習の研究に取り組みたいと考えている。

和歌山県有田郡湯浅町

基本データ（平成 23 年度）

人口	13,625 人	面積	20.80 km ²	学校数	小学校 4 校 ・ 中学校 1 校
和歌山県の中北部に位置し、湯浅湾はアジ・サバ・シラスの漁場であり、古くは熊野古道の宿場街として栄え、醤油発祥の地でもあります。				児童・生徒数	児童 686 名 ・ 生徒 383 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 62 名・75 名 中学校 34 名・38 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	垣内 貞	参加年度	平成 23 年度より参加
23 年度研究推進員 (教科・校種)	南紳也 教諭 国語・小学校		
研究推進担当者	川口 厚之	これまでの協調学習 実践数	公開研究授業 1 回 その他(推進員) 0 回 その他(全教員) 0 回
プロジェクトに関する問い合わせ先	0737-63-1111 (sidou2@yuasa.ed.jp)	(おおよその数)	

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

隣接する有田市と有田川町の取組を知り、先進市町と連携した取組が可能で、指導方法の工夫改善や教員の意識改革等に有効であると判断して本プロジェクトに参加した。

本町の教育課題の中心は、児童生徒の学力向上である。近年、少しずつではあるが、全国的な調査と比較しても改善の傾向にあるものの、まだまだ十分なものにはなっていない。特に、児童生徒の表現力やコミュニケーション力に課題が多く、新学習指導要領でも重視されている言語活動を普通の授業においていかに充実させていくかが喫緊の課題である。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

国語科で1名を研究推進教員とし、校内においては推進教員が所属している高学年を中心に管理職の指導のもと、協調学習の実践研究を進めてきた。当該校は2年前から国語科における伝え合いを中心とした学習指導の研究を進めていたことから、今回の研究推進が学校にとっても新しい切り口となり、教職員の視野が広まったと言える。取組としては、まだこの1年だけのものであることから、推進教員を含めてまだまだ協調学習についての理解が十分でないことから、他の実践事例からさらに学ぶべき点が多いと考える。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

今後は、協調学習の手法を他校へも伝達し、授業改善の新しい切り口として、共通理解を図りながら推進していきたい。その場合、近隣市町と連携しながら研究推進員を中心に、学力向上に向けた取組へとつなげていきたい。

和歌山県有田郡広川町

基本データ（平成 23 年度）

人口	7,760 人	面積	65,31 km ²	学校数	小学校 3 校 ・ 中学校 2 校
広川流域に位置し、歴史と教育の町、広川町。「稲むらの火」により、津波から村人を逃がした濱口梧陵翁。防災で全国をリードしている町です。				児童・生徒数	児童 422 名 ・ 生徒 205 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 59 名・60 名 中学校 20 名・24 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	山口 政明		参加年度	平成 23 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	榎本さち教諭 国語・小学校				
研究推進担当者	畑屋 好之		これまでの協調学習 実践数 (おおよその数)	公開研究授業	1 回
プロジェクトに関する問い合わせ先	0737-63-1122 (内線 262)			その他(推進員)	2 回
				その他(全教員)	0 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

有田市、有田川町の実績を聞き、授業の工夫改善や教員の意識改革等に有効であると判断して本プロジェクトに参加した。

落ち着いた教育環境の中で学校教育が展開できている。学力テスト等ではまだまだ課題も大きいですが、教師と子供が一緒になって取り組んでいる。子どもの学習意欲を大切にしたい出力型の授業の必要性を教職員で共有し、指導の工夫改善への意識を高める必要がある。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

研究推進教員を中心に協調学習の実践研究を進め、当該教員の指導力向上がみられる。また、当該所属校において、学校研究課題と協調学習の取組の接点が明確になりつつある。子どもの実態に応じた授業展開の工夫がなされてきた。

今後は、積極的に実践研究に取り組み、多くの教員が協調学習の良さを知るようにする必要がある。そのうえで実践する教員を多く育成するとともに、授業改善への気運を一層高めていく必要がある。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

研究推進員を軸にして協調学習について学ぶ場を作っている。近隣市町教育委員会と連携し実践研究や交流を進めている。

来年度も、他市町との連携や交流を図りながら研究推進員を軸に取組を推進し、人材育成とともに授業改善への意識の向上を図っていきたい。

和歌山県有田郡有田川町

基本データ（平成 23 年度）

人口	27,871 人	面積	351.77 km ²	学校数	小学校 15 校 ・ 中学校 5 校
有田川流域に位置し、柑橘栽培が盛んな地域で、人や自然、産業、伝統文化など様々な「きらめき」を感じることができる魅力ある町です。				児童・生徒数	児童 1,533 名 ・ 生徒 871 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 190 名・200 名 中学校 101 名・112 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	楠木 茂		参加年度	平成 21 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	面矢和弥 教諭 社会・中学校	川口勝寛 教諭 社会・小学校			
研究推進担当者	川岸 俊夫		これまでの協調学習	公開研究授業	4 回
プロジェクトに関する問い合わせ先			実践数	その他(推進員)	6 回
0737-52-2111 (kawagishi.t@aridagawa-town.ed.jp)			(おおよその数)	その他(全教員)	8 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

和歌山県教育委員会主催の研修会にて宮崎県五ヶ瀬町の取組を拝聴し、授業の工夫改善や教員の意識改革等に有効であると判断して本プロジェクトに参加した。

本町においては、落ち着いた環境の中で学校教育が展開でき、学力テスト等では成果も十分に見取れるが、古典的な入力型の授業が依然多く見られる。子どもの学習意欲を大切にしたい出力型の授業による教育効果を重視し、指導の工夫改善を図っていく必要がある。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

研究推進教員を中心に実践研究を進め、当該教員の指導力が向上するとともにリーダー的資質も高まった。また、研究推進教員の所属校においては、協調学習の取組を起点に授業改善への意識が高まっている。加えて、校長会や学校訪問等で本取組を紹介する中で、校内研修において協調学習の手法を導入した授業研究を行う学校も見られるようになった。

今後は、積極的に実践研究に取り組むリーダー的教員を多く育成しながら授業改善への気運を一層高めていく必要がある。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

研究推進教員を軸に協調学習について自主的に研修する研究会を立ち上げ、取組の推進を図るとともに、近隣市町教育委員会と連携し実践研究や交流を進めている。

来年度も、近隣市町との連携や交流を図りながら研究推進教員を軸に取組を進め、人材育成とともに授業改善に広く反映させていきたい。

島根県浜田市

基本データ（平成 23 年度）

人口	59,798 人	面積	689.60 km ²	学校数	小学校 25 校(内 1 分校)・中学校 9 校
全国に誇れる海、山などの美しい自然と石見神楽や石州半紙などの伝統文化を有し、人と文化と自然との調和のとれた県西部の都市です。				児童・生徒数	児童 2,906 名・生徒 1,507 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 338 名・ 355 名 中学校 176 名・ 193 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	山田 洋夫	参加年度	平成 23 年度より参加
23 年度研究推進員 (教科・校種)	佐々木拳匡教諭 算数科・小学校		
研究推進担当者	大坂 吉二	これまでの協調学習	公開研究授業 2 回
プロジェクトに関する問い合わせ先		実践数	その他(推進員) 2 回
電話・0855-25-9710		(おおよその数)	その他(全教員) 0 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

以前講演講師をお願いした日渡円五ヶ瀬町教育長(当時)の紹介、及び五ヶ瀬町視察を行った浜田市議会総務文教委員会の紹介により、教育委員会事務局員が平成 22 年度の報告会に参加した。浜田市では、基礎的な知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力等に課題があり、本プロジェクトが有効であると考えた。報告を受け、浜田市教育委員会として平成 23 年度より参加することを決定した。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

研究推進員 1 名が、東京大学で開催された研修会に参加し、小学校算数科での取組を進めた。7 月に「合同な図形」、12 月に「四角形と三角形の面積」の公開授業を行った。7 月の実践の反省をもとに、児童の思考を大切にしたいエキスパート活動の課題設定を行うこと、視点を明確にしたジグソー活動、クロストークを行うことで、目的意識のはっきりした授業が展開されたと感じている。エキスパート活動での課題設定の仕方、ジグソー活動の在り方やクロストークとの関係性等、今後の課題として取組む必要のあることが多いが、創り上げていく喜びを大切にしたいと考えている。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

浜田市では、研究推進員の所属する学校と研究推進員の自主研修サークルに頼ることが大きく、市としての取組に発展させる必要があると考えている。12 月の公開授業には、市議会議員の参加が 6 名、他校からの参加が 9 名あり、発展性を感じている。研究推進員を 2 名にしてプロジェクトに参加すること、研究推進員をサポートする体制を作っていくことを課題として、取組を進めていこうと考えている。

島根県鹿足郡津和野町

基本データ（平成 23 年度）

人口	8,486人	面積	307.09 km ²	学校数	小学校 6 校・中学校 3 校
文豪 森鷗外や哲学者 西周などの先人を輩出し、七百有余年の歴史を持つ、山陰の小京都と呼ばれている町です。				児童・生徒数	児童 299 名・生徒 181 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 51 名・55 名 中学校 41 名・43 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長職務代行者	世 良 清 美		参加年度	平成 23 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	日野晶子教諭 国語・中学校	大野常馬教諭 社会・中学校			
研究推進担当者	清 水 浩 志		これまでの協調学習	公開研究授業 回	
プロジェクトに関する問い合わせ先	津和野町教育委員会 TEL 0856-72-1854		実践数	その他(推進員) 2 回	
			(おおよその数)	その他(全教員) 回	

【プロジェクト参加に至った経緯，市町としての教育課題】

島根県が行う学力テスト結果からも町内の小中学生の学力向上が充分図られていない状況の中、今年度、広島県安芸太田町を訪問させていただき、協調学習の効果を実感し、その学習効果を取り入れるため参加しました。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

今年度より町内 2 中学校に研究推進員を配置し、取り組みを行ってきました。年度途中からの参加ということもあり、公開授業のレベルまでは到達していませんが、試行実施的な授業は行ったところです。

そのような中でも、生徒たちがお互いの資料をもとに考え、学び合うという「ジグソー法」での学習の手ごたえは感じられました。また、他者との意見交流により考えの深まり、読み取りを実感している生徒、読み取りに対する興味・関心を強めた生徒が多く、主体的に学習に取り組む生徒が多くなる成果がありました。ただ、授業者自身が協調学習の方法を十分に身につけていないため、通常の話し合い活動との区別化が図れていないことや、研修に参加して授業を参観した教員のみでの理解にとどまっている現実があります。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

今年度途中からの参加ということもあり、取り組みについて模索している状態です。

2 中学校の国語科と社会科で研究推進員として取り組んでいます。今後相互に情報交換を行いながら校内で広めていきます。その結果、3 人組の話し合い活動を他教科に広めていくことが出来ればより効果が生まれると感じています。また、今後は中学校のみならず町内の小学校にも取り組みを広げて行いたいと考えています。

広島県山県郡安芸太田町

基本データ（平成 23 年度）

人口	7480 人	面積	342.25 km ²	学校数 10	小学校 7 校・中学校 3 校
全小中学校が小規模校（小 4 校は複式学校）であり、学力も一定程度定着しており、活用する力、コミュニケーション能力の育成に組んでいる。				児童・生徒数	児童 265 名・生徒 175 名
				教職員数 （常勤・全職員）	小学校 61 名・ 中学校 41 名 65 名 50 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	二見 吉康	参加年度	平成 22 年度より参加
23 年度研究推進員 （教科・校種）	栗津政夫 教諭 数学・中学校	亀岡圭太 教諭 理科・中学校	萩原英子 教諭 算数・小学校
研究推進担当者	川上 克己	これまでの協調学習実践数 6	公開研究授業 6 回（内訳：推進員及び希望者対象 5 回、全教員対象 1 回）
プロジェクトに関する問い合わせ先			
電話・e-mail など 0826-22-1212 k.kawakami@akiota.jp			

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

本町の児童生徒は基礎的・基本的な学力は、一定程度定着している。知識・技能を活用する力、主体的、自律的な学習習慣や学習意欲、コミュニケーション能力・人間関係力の育成をねらい参画した。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

学習活動の活性化、児童生徒実態に基づくグルーピングや授業構成等に効果的であった。とりわけ、児童生徒のアンケート回答からも楽しんで授業を受けていることが伺え、その後の理解に効果があることが分かった。加えて、「協調学習」を引き起こす学びの創造が生徒指導（積極的生徒指導）の側面にも効果があると感じる。また、小規模複式学級の 3 人あるいは 2 人でも「協調学習」は取り入れられ、課題解決や複式授業の間接指導の充実につながる可能性を感じている。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

平成 22 年度は、中学校数学科及び理科において各 1 名ずつ研究推進員を任命し、副代表教育長・事務局次長を本町が担った。平成 23 年度は小学校 算数科へも 1 名の研究推進員を任命するとともに代表教育長・事務局長を担い、より多くの研究推進員との教材づくりや組織マネジメント、町内外も含め公開授業や実践報告により「協調学習」の成果の波及と取組の発信を行なった。

福岡県飯塚市

基本データ（平成 23 年度）

人口	132,418 人	面積	214.13 km ²	学校数	小学校 22 校 ・ 中学校 12 校
飯塚市は福岡県中部に位置する市である。筑豊三都一つ。筑豊で最大の人口を擁し、筑豊の政治・経済の中心機能を持つ都市である。				児童・生徒数	児童 6,724 名・生徒 3,360 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 451 名・ 470 名 中学校 282 名・ 297 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	片峯 誠		参加年度	平成 23 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	水谷隆之教諭 算数・小学校	橋爪英雄主幹教諭 数学・中学校			
研究推進担当者	指導係長 石井 幸子		これまでの協調学習	公開研究授業 3 回	
TEL:0948-22-0380(内)334 FAX:0948-29-5440			実践数 13	その他(推進員) 2 回	
e-mail: s-isii38@city.iizuka.lg.jp			(おおよその数)	その他(全教員) 13 回	

【プロジェクト参加に至った経緯，市町としての教育課題】

同じ筑豊に位置する福岡県香春町は本プロジェクトに平成 22 年度より参加されている。政治・経済はもとより、教育面においても筑豊の中心的機能を果たす役割を求められている本市に、この香春町の荒木教育長を通じて協調学習の話があった。

飯塚市がめざす教育『未来の飯塚市を担う「かしこく」「やさしく」「たくましい」子どもの育成』のための中心的な手立てとして、この協調学習は必要不可欠であるという本市片峯教育長の決断によりプロジェクトに参加する運びとなった。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】 成果○ 課題▲

○平成 23 年 11 月 25 日(金)に、算数部会の公開授業研究会を片島小学校で開催した。

研究推進員の水谷教諭が代表授業を行い、県内外より約 40 名の参観があった。

○東大からも 2 名、県外からも 8 名の研究推進員に参加していただき、協調学習についての協議を深めることができた。

▲中学校では教科の枠があるため、他教科への広がり課題である。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

1. 研究組織 平成 23 年 5 月 2 日(月) 飯塚市コンソーシアム推進会議開催(11 名参加)
2. 市独自の取組
 - 平成 23 年 4 月 15 日(金) 校長研修会開催…指導係長による協調学習の概要説明。
 - 平成 24 年 2 月 14 日(火) 教頭研修会開催…片島小森山校長による協調学習の講話。
3. 来年度の方向性
 - 研究推進員の在籍する片島小学校と飯塚第一中学校を、飯塚市教育委員会研究指定・委嘱校として指定し、市内外の教職員対象の研究発表会を平成 24 年 11 月に計画している。算数部会の代表授業も立候補する予定である。

福岡県田川郡香春町

基本データ（平成 23 年度）

人口	12,337 人	面積	44.56 km ²	学校数	小学校 4 校・中学校 2 校
旧産炭地域である。五木寛之氏著『青春の門』の書き出しに「香春岳は異様な山である」と紹介されている。セメント産業でも栄えた町。				児童・生徒数	児童 566 名・生徒 263 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 57 名・71 名 中学校 27 名・36 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	荒木 博史		参加年度	平成 22 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	宮成努教諭 国語・小学校	高瀬美智也教頭 国語・小学校	本田義隆教頭 国語・小学校		
研究推進担当者	宮成 努 教諭		これまでの協調学習	公開研究授業	3 回
プロジェクトに関する問い合わせ先			実践数	その他（推進員）	0 回
香春町立勾金小学校 0947-32-8409			(おおよその数)	その他（全教員）	0 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

平成 20 年度に「学校の統廃合問題」で宮崎県五ヶ瀬町に教育視察に行った。その後、日渡円教育長（当時）の五ヶ瀬町の教育ビジョンに学び、連携をとりながら研修をさせていただいている。香春町の教育課題は①学力向上を目指すこと②体力の向上に努めること③規範意識の確立を目指すなどの 3 つの教育課題を定めて取組を進めている。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

国語科の授業の中で協調学習の取組を進めてきたが、言語活動の充実を目指している教科の学習では有効であった。特に、読み、書き、自分の意見を述べるという授業を進めることで、判断力、思考力、表現力がつくこと確信している。全国学力調査の教科の「活用」力をつけるためには、確かに効果的な学習である。課題としては、教材研究を入念に行い、学習指導法にも工夫が求められる「協調学習」は、児童生徒の実態、教師の熱意、教師の意欲からなかなか進まない。また、初めから無理だと思っている教師が多い。事務局の推進活動にも問題があると反省している。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

香春町では、勾金小学校の宮成努教諭が中心で研修をしたり、公開授業などの実践をしたり、県外の他市町村の研修に参加したりして研修を深めてきた。しかし、平成 23 年 7 月上旬に勾金小学校の教師が水難事故で急死した。その教師の人権・同和教育の担当の職務も教務主任の職務も兼任して行っている。それで、多忙な業務の中で授業を行うことが困難な状況が出てきている。したがって、現在は、校長、教頭が代表となって「新しい学びのプロジェクト」の研修会に参加している状況である。今後は、新しいメンバーで研究推進を行うように計画を進めている現状である。

熊本県阿蘇郡南小国町

基本データ（平成 23 年度）

人口	4 5 3 4 人	面積	1 1 5 . 9 km ²	学校数 4	小学校 3 校・中学校 1 校
「日本で最も美しい村」連合に加盟し、美しい農山村の景観や文化を守る活動をしている。温泉を中心とした観光にも力を入れている。				児童・生徒数	児童 1 9 5 名・生徒 1 0 8 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 3 0 名・3 7 名 中学校 1 4 名・1 7 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	武田 邦典		参加年度	平成 2 2 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	原島秀樹教諭 社会・中学校	廣津望都教諭 国語・小学校			
研究推進担当者	倉岡 巧		これまでの協調学習 実践数	公開研究授業 4 回 その他(推進員) 7 回 その他(全教員) 1 回	
プロジェクトに関する問い合わせ先			(おおよその数)		
0 9 6 7 - 4 2 - 0 0 4 7					

【プロジェクト参加に至った経緯，市町としての教育課題】

- 平成 2 1 年度に五ヶ瀬町の日渡教育長（当時）に来町いただき、教育長、事務局長、倉岡が平成 2 2 年度から協調学習に関する研究を東京大学と連携し推進していくという話を伺った。その後、3 名で検討し、プロジェクトに参加することを決定した。
- 確かな学力の定着が本町の最大の教育課題である。特に、コミュニケーション能力に課題がある。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

- 本町には、全教職員が加入している南小国町教育研究会が組織されている。研究部会の一つである「学力充実」に協調学習研究推進を位置づけている。平成 2 2 年の教育研究会総会において、研究推進担当者が「協調学習の考え方を取り入れた授業展開」というテーマで講話をした。2 3 年度の総会において、原島研究推進員が社会科における協調学習の考え方を取り入れた授業実践について話をした。
- 協調学習の考え方を取り入れた授業展開については、町内の先生方には理解していただいた。また、公開授業を参観した先生方から「中学 1 年生で、あれだけのまとめる力が育っていることに驚きました。自分の考えを相手に伝えて、更に伝える力や自分の考えを深める活動は、後々、自分と仲間の結びつきに役立つものと思います。」等の感想をいただいた。
- 協調学習の良さは理解されてきたと考えるが、授業実践の広がりがまだまだである。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

- 来年度も参加する予定である。教科は、社会科と国語科を引き続き考えている。

大分県竹田市

基本データ（平成 23 年 4 月）

人口	25,232 人	面積	477.7 km ²	学校数 19 校	小学校 13 校 ・ 中学校 6 校
南に祖母連山、北に久住連山を仰ぎ、大自然に囲まれた名水の里。「荒城の月」の岡城跡や久住高原をはじめ幾多の温泉で有名な市。				児童・生徒数	児童 937 名・生徒 491 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 127 名・10 名 中学校 60 名・14 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	吉野 英勝		参加年度	平成 22 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	教諭 渡辺久美 算数・小学校	教諭 堀公彦 理科・中学校			
研究推進担当者	指導主事 和田 三成		これまでの協調学習 実践数	公開研究授業	10 回
プロジェクトに関する問い合わせ先			(おおよその数)	その他(全教員)	5 回
電話 0974-63-4833 竹田市教育委員会					

【プロジェクト参加に至った経緯，市町としての教育課題】

竹田市の課題である①学習意欲の向上②活用力③コミュニケーション能力の向上を図るために、旧態依然とした教師主導の授業から、子ども主体で言語活動の充実を図った授業、全員の子どもが参加し、子どもの声でつくる学びあいのある授業へと転換を図るための有効な教育手法と考え、「協調学習」を取り入れていくことが、竹田市の子どもの生きる力をはぐくむ上で必要だと考えたから。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

- 2 年間の取組で竹田市内の教師はもちろん、県内のたくさんの教師や指導主事等に「協調学習」についての理解を深めることができた。
- 「理科」「算数」だけでなく「国語」や「英語」「道徳」等他の教科や領域での実践も広がってきた。
- 「協調学習」を自主的に校内研修に取り入れる学校もでてきた。
- 「協調学習」の実践の共有化を図るためのデータベース化を図ることができた。
- 「協調学習」の各活動の充実を図り、更なる学びの質の向上をめざす。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

- 22 年度…CoREF との連携研究委員 1 名（中「理科」）と竹田市協調学習推進委員 3 名（中 1 名、小 2 名いずれも「理科」）で研究の推進、年 3 回の公開授業・研究会の実施
- 23 年度…CoREF との連携研究委員 2 名（中「理科」と小「算数」）と竹田市学力向上支援教員 2 名（中 1 名「数学」、小 1 名「国語」）で研究の推進、年 8 回の公開授業、うち年 2 回の研究会の実施
- 24 年度…Coref との連携研究委員と竹田市学力向上支援教員で研究の推進
 - ・ 研究推進校への支援及び公開研究会の実施
 - ・ 各学校 1 実践の取組→竹田市教育フォルダ（共有）への蓄積

大分県豊後高田市

基本データ（平成 23 年度）

人口	24,240 人	面積	206.64 km ²	学校数	18 校	小学校	12 校・中学校	6 校
「教育のまちづくり」をスローガンに掲げ、「学びの姿」の構築を図るため、学校と家庭、地域が一体となった教育を推進している。				児童・生徒数	児童	1086 名・生徒	633 名	
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校	127 名・	154 名	
					中学校	76 名・	92 名	

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	河野 潔		参加年度	平成 23 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	時枝博文教諭 算数・小学校	財前由紀子教諭 国語・中学校			
研究推進担当者	指導主事 小川 匡		これまでの協調学習	公開研究授業	10 回
プロジェクトに関する問い合わせ先	0978-53-5112		実践数	その他(推進員)	8 回
			(おおよその数)	その他(全教員)	2 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

学力に関する各種の調査から、思考力、判断力、表現力等に課題がある。課題発見・課題解決力、論理的思考力、コミュニケーション能力や多様な観点から能力等の育成・習得が求められ、「主体的な学びを促す場の工夫」「質を高める課題の工夫」「既習事項を他の場面で活用できる力の育成」等を協調学習により、取り組みたいと考えた。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

(成果) 講義形式ではなく、学習者が興味・関心をもつことのできる作業や活動を仕組むことにより、主体的な学びの促進につながり、探求心が芽生えた。また、自分の考えと他人の考えとの比較が容易になり、意見交流がスムーズに運び、自らの考えを広げ、深めることにつながり、多様な考えができるようになった。

(課題) 推進校での研修は深まってきているが、市内全教職員には広がっていない。あらゆる研修の場で、協調学習について研修を行い、児童生徒の確かな学力の育成のため、授業力の向上に努めていきたい。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

教育委員会主催の「学校組織マネジメントリーダー養成講座(参加者:管理職・教務主任等)」で、三宅なほみ先生をお呼びして、「協調学習」の手法を学んだ。また、各種研修会の場で、推進員の時枝教諭、財前教諭が協調学習の授業づくりの説明や実際に授業公開を行った。今後は、推進員を中心に市内各校で気軽に協調学習が取り組める体制づくりを推進していきたい。また、大分県では3市町が協調学習に取り組んでいるので、授業公開等で交流をしていきたい。

大分県玖珠郡九重町

基本データ（平成 23 年度）

人口	1 0 4 2 1 人	面積	2 7 1 . 4 km ²	学校数	小学校	6 校・中学校	4 校
農林業と観光の町です。国立公園や国定公園に一部指定され「緑と自然の宝庫」です。温泉や地熱が数多く点在する魅力あふれる町でもあります。				児童・生徒数	児童	4 3 4 名・生徒	2 5 9 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校	6 3 名・	8 4 名
					中学校	4 8 名・	5 9 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	古後 粒勝		参加年度	平成 2 3 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	恒任珠美教諭 国語・小学校	吉住聡教諭 社会・中学校			
研究推進担当者	小野一信（九重町教育委員会）		これまでの協調学習	公開研究授業	5 回
プロジェクトに関する問い合わせ先			実践数	その他（推進員）	8 回
電話・e-mail など	0 9 7 3 - 7 6 - 3 8 2 8		(おおよその数)	その他（全教員）	1 5 回

【プロジェクト参加に至った経緯，市町としての教育課題】

平成 2 2 年度より五ヶ瀬町との交流が進み、それがきっかけとなりこの取り組みを知った。学力向上に向けて、児童・生徒の興味・関心を高め、「活用の力」を伸ばすことが課題である。一人ひとりが考えを持ち、多様な考えを交流し理解を深めていくことを目的に、このプロジェクトに参加をした。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

一人ひとりが考えを持ち、多様な考えを交流し理解を深めていく「協調学習」の学習方法が授業実践や各種研修会を通して定着してきている。授業を通して、児童・生徒のいきいきとした姿が見られ、学習意欲が高まっていると実感することが多い。また、授業に向けての資料作成をする中で、教職員のつながりが深まったとの声も聞かれる。

研究推進員を 2 名選出し、国語科・社会科（教科担当者会）を中心に取り組んだが、算数科（2 回）や理科（1 回）の公開授業も実施でき、町の研修会を開催したことで他教科への広がりを見せている。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

協調学習の研修会を下記のように実施した。

- ・ 7 月 2 5 日：「協調学習」研修報告会（国語科・社会科担当、研究主任）
- ・ 8 月 2 3 日：九重町「協調学習」研修会（国語科・社会科、研究主任、管理職）

次年度へ向けて、計画的・組織的な展開で、より効果的な取り組みにつなげたいと考えている。そのためにも、近隣の自治体との連携を図り先進的な取り組みに学び、授業を中心とした交流を進めたいと考えている。

宮崎県宮崎市

基本データ（平成 23 年度）

人口	401,658 人	面積	644,61 km ²	学校数	小学校 48 校・中学校 25 校
「太陽と緑」に象徴され、温暖な気候風土に恵まれ、松の大樹海や亜熱帯植物の繁殖する海岸を有する南国的色彩に富む九州の中核市				児童・生徒数	児童 22,830 名・生徒 10,989 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 1,392 名・ 1,434 名 中学校 847 名・ 876 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	二見 俊一		参加年度	平成 22 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	甲斐一陽 教諭 数学・中学校	吉野了太 教諭 算数・小学校			
研究推進担当者	福永 弘幸		これまでの協調学習	公開研究授業	1 回
プロジェクトに関する問い合わせ先	45gakyou@city.miyazaki.miyazaki.jp		実践数	その他(推進員)	1 回
			(おおよその数)	その他(全教員)	3 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

宮崎市の児童生徒の学力の実態は、諸検査において基礎的・基本的な知識及び技能の習得は概ね良好な結果が得られているものの、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力の育成や自ら学習に取り組む意欲の醸成が課題としてあげられる。

そこで、宮崎市では、学び合いの中で課題解決に意欲的に取り組む児童生徒を育成するための一つの手段として、宮崎市教育情報研修センター研究員「算数・数学教育研究班」を中心に協調学習についての研究に取り組むことにした。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

(成果) ○ 授業モデルを作成したことで指導者にとって協調学習の進め方が明確になり児童生徒も学習活動に積極的に取り組むなど学習意欲の向上が見られた。

○ 公開授業や宮崎県及び宮崎市の教育研究発表会において、協調学習の有効性を発表する機会が得られ、多くの先生方に広く情報を提供することができた。

(課題) ○ 協調学習を取り入れた学習活動の展開について、他教科での活用方法についての研究を深めるとともに、児童生徒の発達段階に応じた小中一貫した協調学習の進め方についても研究を進める必要がある。

【市町レベルでのプロジェクトへの取組】

- ・研究組織：宮崎市教育情報研修センター研究員「算数・数学教育研究班」 6 名
- ・研究授業：平成 22 年度 公開研究授業 1 回 研究授業 1 回
平成 23 年度 公開研究授業 1 回 研究授業 4 回

宮崎県東諸県郡国富町

基本データ（平成 23 年度）

人口	20,594 人	面積	130.71 km ²	学校数 7	小学校 4 校・中学校 3 校
宮崎市の西、清流本庄川が流れる自然豊かな町である。千切りダイコンや施設園芸などの農畜産業、世界有数の工場の立地や盛んな商業などバランスがとれた街である。国指定史跡の古墳や歴史的な遺物も数多く残る。人情豊かな元氣あふれる街づくりを目指している。				児童・生徒数	児童 1,069 名・生徒 589 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 71 名・ 80 名 中学校 63 名・ 67 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	豊田 暁光		参加年度	平成 22 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	林田恭二教諭 理科・小学校	福園祐基教諭 理科・中学校			
研究推進担当者	柘植 幹雄		これまでの協調学習実践数（平成 22 年度を含むおおよその数）	公開研究授業	2 回
プロジェクトに関する問い合わせ先				その他（推進員）	3 回
電話 0985-75-9401（教育総務課） kyouiku@town.kunitomi.miyazaki.jp				その他（全教員）	14 回

【プロジェクト参加に至った経緯、市町としての教育課題】

町の最重点教育的課題は児童生徒の学力向上であり、教員の指導力向上を図ることが求められている。新たな学習指導要領では、言語活動の充実を図る指導を重視しているが、理論的かつ体系的に組み立てられた東京大学の提唱する「協調学習」は、学校現場に取り入れることができれば、それに応え得る授業改善の具体的方向となる。

本教育研究センターではこれらのことを踏まえて、2 年間の実践的な研究を行った。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】 ○成果 ●課題

- 協調学習の学習スタイルは、児童生徒に好意的に受け入れられた。
- 協調学習が授業に使える新しい学びのスタイルとして教師に受け止められた。
- 多くの教科、いろいろな学習段階で協調学習が有効に使えることが分かった。
- 学習課題の設定の在り方やその意識化の重要性とともに、そこに向けた話し合い活動の指導の在り方が明確になった。
- エキスパート資料（部品）づくりに難しさがある。
- 評価（活動、ワークシート分析）は、その方法と解釈に研究と習熟が必要である。
- 子どもの認識レベルを十分把握した上で課題や資料を設定する必要がある。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

プロジェクトの理科部会に所属（小中各 1 名の推進員）しているが、センター研究員全員が所属の学校で国語、社会、算数の検証授業を行った。検証授業では、国語・理科の町内研究組織と連携を図った。公開授業（11 月理科）には郡内理科主任も参加し、専門的な協議を進めた。研究資料は、WEB 上にデータベース化し、要望があれば自由に閲覧・活用できるようにしている。

宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町

基本データ（平成 23 年度）

人口	4 3 2 2 人	面積	171.77 km ²	学校数	小学校 4 校・中学校 2 校
中山間地のデメリットと考えられていた条件を、教育に関する「強み」ととらえた「五ヶ瀬教育ビジョン」の具現化に町全体で取り組む。				児童・生徒数	児童 2 2 6 名・生徒 1 3 1 名
				教職員数 (常勤・全職員)	小学校 5 2 名・ 中学校 2 6 名・ 6 2 名 3 1 名

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成 23 年度）

教育長	黒木 貴		参加年度	平成 2 2 年度より参加	
23 年度研究推進員 (教科・校種)	津奈木考嗣教諭 (I 期) 国 語 小学校	大久保朋広教諭 (I 期) 社 会 小学校	堀 真朋教諭 (II 期) 算数数学 小学校	村中田 学教諭 (II 期) 算数数学 中学校	加藤裕邦教諭 (II 期) 社 会 小学校
研究推進担当者	大久保朋広 (上組小学校) 澤野幸司 (町教委事務局)		これまでの協調学習 実践数 (H 2 3 年度)	公開研究授業	3 回
プロジェクトに関する問い合わせ先	0 9 8 2 - 8 2 - 1 7 1 0 kyoiku01@town.gokase.miyazaki.jp		1 3 回	その他 (推進員)	9 回
				その他 (全教員)	1 回

【プロジェクト参加に至った経緯，市町としての教育課題】

平成 2 0 年度より五ヶ瀬教育ビジョンにおける「学習内容に最適な学習規模で学習を行う授業システム (G 授業)」の実践を重ねてきた。その考えが徐々に浸透し、実践化が図られる中、課題であった日常の授業実践の充実に資するために、協調学習の考え方を取り入れた授業づくりの研究に C o R E F の支援を受けながら取り組むことにした。その際、本町単独では多くの教科の研究を進めていくことは困難さがあったため、協調学習の授業づくりに関心を示した他の自治体と連携し、研究推進員による研究の成果を本町にも還元できるような体制づくりを行った。

【市町レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

研究推進員及び五ヶ瀬教育ビジョンにおける協調学習研究推進部会を中心に、協調学習の考え方を取り入れた授業づくりに向けた研修会の開催や授業公開を行うことができた。その中で、意識の高い教職員を中心に教材分析や子どもの学びの理解について深まりが見られ、その影響が他の職員へも波及しつつある。

ただ、授業の具体として子どもの学びの深まりが発言や対話等から強く感じられる授業づくりまでには至っておらず、そのことが研究推進員以外の職員の実践化につながっていない原因でもある。

【市町レベルでのプロジェクトへの取り組み】

本内容については、「市町研究推進のモデル」で詳しく述べる。

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校（宮崎県都城市）

基本データ（平成23年度）

市人口	168,965 人	市面積	653.31 km ²	学校種	併設型県立中高一貫校
本校は開校2年目の併設型の中高一貫校である。「質実剛健」の建学の精神のもと6年間の一貫した教育を実践している。				生徒数	中学80人・高校840人
				教職員数 (常勤・全職員)	中学校 (0名・9名) 高校 (3名・69名)

プロジェクト研究推進に関わるデータ（平成23年度）

学校長	前田 哲司	参加年度	平成22年度より参加
23年度研究推進員 (教科・校種)	黒木 亨 教諭 理科・中学校	三重野 修 教諭 国語・中学校	
研究推進員担当者	玉利 勇二 教頭	これまでの協調学習	公開研究授業 3回
プロジェクトに関する問い合わせ先		実践数	その他(推進員) 6回
0986-23-0223		(おおよその数)	その他(全教員) 2回

【プロジェクト参加に至った経緯、学校としての教育課題】

平成22年度附属中学校開設に向けて特色ある学校づくりを考える上で、宮崎県五ヶ瀬町教育委員会が取り組んでいた「協調学習」がとても参考になるものであった。そこで本校でも取り組むために五ヶ瀬町教育委員会への視察や新しい学びプロジェクト報告会にも参加させていただき、新しい学びプロジェクトに学校単独で参加できるようになった。本校の教育的課題は3つある。1つ目は全教育活動を通じた「心の教育」の充実、2つ目は確かな学力の向上、3つ目は家庭・地域社会との連携強化であるが、特に学力の向上を目指す上で生徒がともに学び合い学習意欲を高める授業「協調学習」の工夫・改善に努める。

【学校レベルでの協調学習研究推進についての成果と課題】

成果としては、確かな学力の向上を図るための学習指導法の工夫・改善を図る上で、協調学習への取り組みは大きな手立てとなった。協調学習の研究授業を国語科や理科で行ったが、全職員で授業研究会を実施することで協調学習への理解が深まり、授業力の向上と生徒の確かな学力の向上となった。また、生徒の話し合い活動への意欲が湧き、更なる発展へとつながっている。課題としては、教科・領域への拡大である。

【学校レベルでのプロジェクトへの取り組み】

新しい学びプロジェクトは今後更なる発展を予期させる取組みであることは本校の生徒の状況を見ても間違いない。今後は本校での取組を市教育委員会や市教科主任会、市教育研究所等に広報し多くの先生方が本校の授業研究会に参加できるよう取り組んでいきたい。また、本校は6年間を見通した特色ある教育を推進しているが、今後は中高一貫校として高校との連携を強化し、他の県との交流も視野に入れながら取り組んでいきたい。